

おのきた

# 尾北校長室から 第42号



## 「種か実か」～ 視点の拡げ方

我が家の「猫の額」ほどの狭い庭に柿の幼苗を植えて数年、今年になってようやくその実をつけ始めた。「桃栗三年、柿八年」と言われるから、8年ほど前に植えたのだろう。自分が植えた柿が育ち、初めてその実を口にすることを楽しみにして待つ日々に、ふと、ある言葉を思い出した。

「樹木にとって、もっとも大切なものは何か、と問われたら、それは**果実**であると誰もが答えるであろう。しかし、実際には**種**なのだ。」



ドイツの哲学者、フリードリヒ・ニーチェ(Friedrich Nietzsche, 1844～1900)の言葉である。生活感覚から言うと、樹木を見た時にはきれいな花やおいしい果実に意識が向きがちである。しかし、例えば**生物学的な見方**では、次の世代に命をつなぐ「種」の方が大切であろう。その実は、動物が食べて種を運んでもらう「単なる手段」という考え方もある。

モノゴトにはいろいろな側面がある。一つのことを多角的に見ていくために、基本となる視座について知っておくと、どこかで役に立つと思うので、今回紹介しておきたい。少し難しい表現だが、「共時的」と「通時的」の2つである。

### ◆共時的なもの見方：

一つの事柄について、**同じ時期の他の事柄と比較し共通点、相違点**を見る ⇒ **横**方向

### ◆通時的なもの見方：

一つの事柄について、その過去・現在という**時間軸に沿って比較し変化**を見る ⇒ **縦**方向



例を2つ挙げてみる。広島東洋カープのセ・リーグ3連覇について論じる時、その年の他球団の戦力との比較であれば、「**共時的**」にものを見ている。一方、球団創立以来の歴代の戦力と比べて語れば、それは「**通時的**」に見ていることになる。もう一つ。時代の特徴を表現する時、現代は「**変化が激しく、多様な価値観の時代**」と表現されることが多い。この時、「変化が激しい」とは、**縦:時間軸**で見た表現、「多様な価値観」とは、**横:水平的、グローバル**な視点からの見方である。

「見方・考え方」を拡げることは、様々な**問題の解決に向けてアプローチする「道筋(手段)」を多くもつ**ことであり、**思考力**を伸ばすことにつながるものである。総合的な探究の時間などでの**探究学習**において、あることを整理したり、比較したり、あるいは論じたりする場面では、まず始めにこの「**共時的(横方向)／通時的(縦方向)**」の**両方**から見るようにしてみるとよい。そうすることでモノゴトの見方・考え方がさらに拡がり、幅広く、深い思考が始まる基点にもなるはずである。

再び柿の話、食べ頃を確かめたくて、ようやく色づき始めた実を一つ食べてみた。口に残るほのかな甘みと、**掌**に残るいくつかの「種」・・・うーん、やはり私は、「実」の方が大切だなあ。



初なりの 柿のうす朱 青空に 映ゆる今年の 秋を愉む